

12月 校長メッセージ

「自分に都合の悪い現実から目を背けない」ということについてお話しします。

皆さんは古代ローマことを世界史で学習します。共和制末期のローマの政治、軍事の指導者にカエサルという人物がいて、帝政ローマへの道を開いた人であることは御存知の通りです。カエサルはいくつもの名言を残しましたが、今日の私がタイトルにしたのは、カエサルのガリア戦記に書かれた「libenter homines id quod volunt credunt」という一文です。「人は自分の望むものを信じる」は、人間の本質をついた言葉だと思います。この言葉をさらに拡大して、「人は信じたくないものは信じない」とか「自分に都合の悪いことは信じない」などいろんな解釈があります。そして、この2学期中の世界の出来事の中に、この言葉を思い起こさせる重要な国際会議がありました。

それは何かというと「COP26」という会議です。

今年のCOP26は10月末日から11月にかけてイギリスのグラスゴーで開催されました。さて、皆さんはCOPとは何の略で、また、何を決める国際会議であるか御存知ですか。さらに皆さんの中に、COP26ではどんな具体的な成果が得られたか、知っている人はいますか。COPは「Conference of the Parties」の略です。ただし、この国際会議の正式名称は「The 26th session of the Conference of the Parties to the United Nations Framework Convention on Climate Change (COP 26), The 16th session of the Conference of the Parties Serving as the Meeting of the Parties to the Kyoto Protocol (CMP16), The 3rd session of the Conference of the Parties serving as the Meeting of the Parties to the Paris Agreement (CMA3)」という長い名前の会議で、国連気候変動枠組条約第26回締約国会議と、京都議定書第16回締約国会合、パリ協定第3回締約国会合の3つの国際会議の複合体です。会議の目的は会議名に含まれていますが、気候変動についての枠組みを話し合うことです。

この会議に参加するために、あるいは会議に対して何かをアピールしたり、抗議したりするための人も含めると、世界中から約10万人もの人がグラスゴーに集まったという報道があります。(朝日)。ブラジルは会議に政府関係者だけで476名を送り込んでいるということでした。東京オリンピックが開催された7月に、日本に入国した人が5万9000人だった(日経)ことと比べても、COP26がいかに大きな国際会議であるかが分かります。

では、この会議ではどんな成果が得られたのか。

私も、今日ここでお話をするためにずい分と調べましたが、気候変動、地球温暖化を抑止するために速攻性があり、かつ効果が高い取り決めがCOP26で決定したとか、国際的な合意に至ったとか、実はあまり聞かない。一部の人は、大きな成果があったと主張しているけれども、毎回繰り返される先進国と途上国との対立が今回も繰り返されたことは間違いない。日本に伝わったCOP26について記事は、プラスチックの使用廃絶を訴えるグレタ・トゥーンベリ氏らの若い世代の行動や、ツバル外務大臣のサイモン・コフェ氏の衝撃的な動画などが挙げられますが、地球環境の急激な悪化について、緊急の対策を立てなければならぬ切実さが伝わってきたという、必ずしもそうではなかったように感じています。

であるにも関わらず、今日、私がこの話題を取り上げたのは、COP26の合意文書の背景にある考え方、合意の前提のあるものを、小石川の生徒に知っておいてもらいたいと考えたからです。COP26そのものは、地球環境の改善に決定的な進展があったとは見えないかもしれません。しかし、共同宣言の冒頭に述べられていることは、人類の抱えている危機を乗り越えていくための、あるべき理想が掲げられ、危機から目を反らさない姿勢が示されているように感じます。

こうした人類の尊厳と存続をかけた理想主義は、20世紀の頃から様々な場面で述べられてきました。しかし、20世紀、21世紀と積み重なる人間の歴史の中で、なかなか達成することができないでいます。人類は地球環境において危機的な状況にある。こうした危機的な状況は誰も望んではいません。この都合の悪い現実から目を反らして生きていくことは、現時点においては可能です。でも、そうした人が多ければ多いほど、より大きな都合の悪い現実と直面することとなるでしょう。

地球環境のようにスケールの大きなことだけではなく、私たちの生活している身の回りにも大小それぞれたくさん都合の悪い現実が存在していますが、こうした現実と向き合い、一つ一つ解決していくことが、とても大事なことで、小石川の生徒の皆さんは、都合の悪いことから目を反らすことなく、少しずつでも問題を解決する態度を身に付けて欲しいと思います。そして、将来、地球環境の問題のように、人類全体に関わる大きな問題に立ち向かえる人に育っていくことを望んでいます。私が校長として、どんな生徒を育てたいかという、「人の世の進歩に貢献できる人」です。